【様式第４号】

令和８年度　　保土ケ谷区障害者自立支援協議会　こども部会　研修会　議事録	
日　　時	令和　８年　９月　１４日（月）　10：00　～　12：00
開催場所	保土ケ谷区役所３階　３０１・３０２会議室
出 席 者	児童発達支援りあん、市立ろう学校、ピース和田町、パレットハウス天王町、葵、西部療育センター、en 和田町、コペルプラス天王町、療育スタジオ・ピコ上星川、天王町あけぼの園、反町福祉機器支援センター、プレップサポートセンター保土ケ谷、横浜市教育委員会 SSW、ゆめのね、港北病院、ほどがや地域活動ホームゆめ、瀬戸ヶ谷小キッズクラブ、保土ヶ谷区社会福祉協議会、リバシティ、恵和、すみれ園、県立保土ヶ谷支援学校、市立上菅田特別支援学校、今井ケアプラザ、保土ヶ谷区こども家庭支援課、保土ヶ谷区基幹相談支援センター
欠 席 者	
開催形態	(公開)（傍聴人：　　名）　・　非公開
議　　題	１．　開会挨拶•主旨説明•講師紹介　（5 分）10：00～10：05 /こども部会　北氏：司会 /こども部会長 山下氏（ゆめのね）…あいさつ•主旨説明•講師紹介 ２．講義　（60 分）10：05～11：05 『困った行動』から『困っている子』へ　ー強度行動障害支援の視点ー　行動障害について考える講師：早坂 亮氏 （社会福祉法人恵和 恵和青年寮 課長） 講演内容（別紙資料参照） １．強度行動障害とは？ 強度行動障害は医学的診断名ではなく、「状態像」である。 自傷行為、他害行為、こだわり行動、睡眠の乱れ、異食 などが高頻度で生じ、本人や周囲の生活に大きな影響を及ぼし、特別な支援が必要な状態を指す。 強度行動障害は固定された障害ではない。 適切な理解と支援によって、 ・行動頻度を減らせる ・状態の改善が可能 ２．なぜ行動障害が現れるのか 「困らせたいのではなく、本人が困っている」 行動障害の背景には、 ・伝えたいことが伝わらない ・要求が表現できない ・ストレスが蓄積する という要因がある。 特性と環境のミスマッチ 本人は視覚的に理解することが得意であるにもかかわらず、支援者が言葉だけで説明する環境になっている場合、理解できない状態が続きストレスとなる。

	結果として ・他害 ・自傷 ・パニック などに発展する可能性がある。
	誤学習について 職員を呼びたいが言葉で伝えられない。 最初は、肩を叩く、手を引く（クレーン行為） だったものが、反応してもらえない経験を繰り返すと、 ・自分の頭を叩く ・大きな声を出す ・物を壊す などの行動へ発展しやすい。本人に適切な伝達手段を教えることが予防につながる。
	３.児童期の予防の大切さ 児童期は ・学びの機会が多い ・情報収集がしやすい ・特性把握がしやすい 時期である。 成人期支援者にとって、知りたい情報 ・得意なこと ・苦手なこと ・学校生活の様子 ・集団適応の状況 ・余暇活動 ・好きなこと ・一人で過ごす方法 など、これらの情報が成人期へ引き継がれることが重要である。
	公平と平等 平等　全員に同じ支援を行う 公平　本人に必要な支援を行う 個別支援では、全員が同じ活動をすることではなく、その人に必要な支援を提供することが重要である。
	４．特性の理解 強度行動障害は自閉症との関連が強い。 自閉症は三つ組の障害 ①社会性の特性 ・暗黙のルール理解が苦手 ・場面に応じた行動が難しい

	②コミュニケーションの特性 ・相手とのやり取りが難しい ・気持ちの理解が苦手 ③想像力の特性 ・見通しを立てるのが苦手 ・予定変更に弱い
	感覚の特性 ・聴覚過敏 ・視覚過敏 ・触覚過敏などがある。 例えば聴覚過敏では、講師の声だけでなく、エアコン音・外の音 も同じ大きさで聞こえる場合がある。
	「特性は変えられないが、環境は変えられる」 環境調整のポイント ・時間の工夫 ・場所の工夫 ・方法の工夫 ・見え方の工夫 ・やり取りの工夫
	８．事例紹介 ケース① 長年、自傷、他害があり身体拘束を実施していた利用者。 行ったこと ・本人特性の再評価 ・個別支援 ・スケジュール提示 ・環境調整 結果 ・自傷、他害がなくなった ・薬剤減量 ・グループホーム移行
	ケース② 洗面・歯磨き支援で他害が生じる女性利用者。 タイマー利用を含む手順が複雑で、職員の修正介入が頻発していた。支援員に介入されると不安になり、つかみかかってしまう。自分でうまくできなくてもつかみかかってしまう。 対応 手順を分割し、写真カードの配置を見やすくする、ものの置き場を固定し迷わず使えるようにした。本人が自力で完了できる方法に変更。

結果
・他害消失
・修正介入不要
・自立的に実施可能
となった。

予防的支援の重要性
問題が起きてからの対応ではなく、問題が起きないように環境を整えること。
そのために必要なのは
・本人理解
・本人の特性を継続的に把握する。
・アセスメント、記録
・客観的事実を残す。
・統一された支援
・誰でも同じ支援ができる状態を作る。
・環境調整、チーム支援
・個人プレーではなくチームで取り組む。

記録の重要性
・事実と意見を分ける
・具体的に書く
・読み手を意識する
悪い例
・困っていた
・ストレスがあった
・楽しそうだった
良い例
・頭を叩いていた
・笑顔が見られた
・「行きたくない」と発言した
など、観察可能な事実で記録する。

まとめ
・本人を変えるのではなく支援と環境を整える。
・正しい状態像がつかめれば支援は変わる。
・チームアプローチ（一人の気づきをチームに還元し同じ方向を向いて支援）

3．グループワーク　（30 分）11：05～11：35
テーマ：『困った行動』から『困っている子』へ　ー強度行動障害支援の視点ー　行動障害について考える
★各グループに分かれてテーマに沿って感想や現場での困りごと、早坂氏への質問等を出し合ってもらいます。早坂氏への質問等は、5．質疑応答で回答して頂くかたちを取ります。

	（ファシリテーターは事務局が担当します）。 4．発表•情報共有 （10 分）11：35～11：45 ★各グループで発表をおこないます。 5．質疑応答•講評 （10 分）11：45～11：55 /講師：早坂氏 1 グループ 感想 現場の話で参考になった。自分の事業所でできるか考えさせられた Q. 家庭に求めたいことがあるとき、どのように伝えるとよいか ・「こうしてください」というお願いだけではなく、なぜ必要なのかを共有する。 ・本人の困りごとや成功体験につながる視点で伝える。 ・保護者との認識にズレがある場合は、相談支援専門員や学校など第三者も交えたチームで共有する。 ・「家庭への指導」ではなく、「本人が暮らしやすくなるための協力依頼」 例 ×「毎日スケジュールを見せてください」 〇「予定が見えると混乱や不安が減る様子があるため、ご家庭でも同じ方法を試していただけませんか」
	Q. 失敗談などがあればうかがいたい。 ・スケジュール表を作ったが目の前で破られた ・本人の理解に合わない支援を導入して混乱を招いた ・良かれと思った支援が本人には負担だった 重要なのは、「失敗しないこと」ではなく、 「失敗を記録し、なぜ合わなかったかを分析すること」
	2 グループ （困りごと） ・近くにいる人を叩いてしまうなど他害が癖になると困る。 ・特定の支援者にこだわってしまう。その支援者の動向を気にする。注視行動につながる。 ・家族との一貫性の問題、親と認識が一致しないこと。 ・暴力行為があり入院中のケース。自宅に戻れず、退院できない。 Q. わがままと特性の違いはどう考えるか →「まず特性として考える」 判断の視点 わがまま ・状況を理解している ・他の選択肢も理解している ・その上で自分の主張をしている

	特性 ・状況理解そのものが難しい ・見通しが持てない ・要求の伝え方が分からない ・不安や混乱がある 行動だけを見て判断せず、「なぜその行動が起きたのか」を考えることが重要。
	3 グループ （困りごと） ・本人への支援や手順を共通化しても対応が違ってしまうことがある。統一した対応をとり切れない。 Q. 問題行動がなくなると原因が分からなくなることがある。どう探ればよいか 問題行動が消えた時こそ分析が必要。 ・環境に何か変化はなかったか ・関わる職員は変わったか ・予定は変わったか ・本人の体調はどうか ・支援方法は変更したか 「なくなった理由」を記録する。 支援現場では、 ・何を変えたか ・いつ変えたか ・変えた結果どうなったか を記録することで要因を特定しやすくなる。
	Q. 身体拘束がゼロになったケースは何から始めたか ① 本人理解 ・何が苦手か ・何が分かるか　を整理 ② スケジュール作成 見通しを持てるようにした ③ 視覚的支援 次に何をするかを明確化 ④ 個別環境調整 特性に合わせた生活環境を整備 その結果、他害・自傷がゼロになり地域移行につながった。
	4 グループ Q. 環境調整について。感覚過敏のケースで快適になるように冷房を付けた静養室で過ごしている。ゆっくり過ごすことができる一方でみなんなとの活動ができにくい。環境調整はどこまでするべきか →「理由が説明できる支援であればよい」 ・本人が快適に過ごせているか

	・その環境が本人に必要か ・支援目標と結びついているか 「みんなと一緒に過ごせる方が良いから」だけでは根拠にならない。一方で、 「将来集団活動へ参加する機会を広げたい」という目標があるなら、段階的な挑戦は検討できる。
	Q. ブラジャーを嫌がり外してしまうケースについてどう考えるか ・素材 ・締め付け ・感覚過敏　などを確認する。 代替案、キャミソール、締め付けの少ない下着などを試す。 「着けるか着けないか」ではなく、「本人に合う代替手段はないか」という視点が重要。
	5 グループ （意見） ・強度行動障害への対応だけではなく、発達を伸ばす視点が重要。将来の問題の火消しという視点にはモヤモヤする思いを感じた。 ・問題行動の背景を知ることが大切。 ・発達のどの段階か、こどもの成長速度は速いので、都度変化していく。発達のどの段階にいるのか正しくアセスメントしていくことが大切。 （講師より） 皆さんの解釈と少しづれがあったり、誤解を与えてしまうことがあれば申し訳ない。 火消しという言い方については強度行動障害の状態像の方は生活が破綻して住むところがないケースがいるなかでの表現。 児童期は、伸びしろが大きい、学習の機会が多いため、問題行動への対応だけではなく、得意を伸ばす、成功体験を増やす、自己選択を学ぶことが予防的支援につながる。
	6 グループ Q. 幼少期から物投げ・つば吐きなど。家庭での困りごとへの対応はどうしたらよいか →まず行動の意味を探る。 記録するとよい項目 ・いつ ・どこで ・誰と ・何の前後で ・どのくらい　発生したか。 行動には ・注目を得たい ・要求したい ・嫌なことを避けたい ・感覚刺激を得たい などの機能がある可能性がある。行動の意味が分かれば予防策が立てやすい。

	Q. 噛みつきなどがあり、体を抑える必要があるなど身体拘束についてどうするべきか？職員をケガから守ることも必要。どこまでが拘束ととらえられるか？ →職員や利用者の安全確保は重要。 ただし、 ・必要最小限 ・一時的 ・他に方法がない 場合に限定される。現場では「ケガを防ぐための短時間の制止」と「継続的な身体拘束」を区別しながら対応し、必ず記録と振り返りを行うことが必要である。
	7 グループ (感想) ・放課後デイサービスでは強度行動障害のケースを受け入れられる施設が少ない、人材育成についてなどの課題が出た。 ・支援につながらないケース。家族のスタンスなど複合的な問題がある。 Q. 見立ての違い、価値観の違いがある。支援の統一は何をベースラインにすべきか →ベースラインは「職員の価値観」ではなく「本人の特性とニーズ」である。 支援者間で意見が分かれたら、 ・本人は何に困っているか ・何が分かりやすいか ・どの方法で成功しているか に立ち返る。
	地活など単発利用の方の個別の環境調整が難しいという課題がある。 →完璧な環境調整は難しい。 ・アセスメント情報の共有 ・支援手順書 ・好きなもの ・苦手なもの などの情報収集が重要。 「まず混乱を減らす条件は何か」 を把握することが第一歩となる。 講師のまとめ ・強度行動障害は本人が困っている状態である ・行動そのものより背景をみる ・特性は変えられないが環境は変えられる ・記録とアセスメントが支援の質を決める ・個人ではなくチームで支援する ・児童期の情報が成人期支援を支える 6. 閉会挨拶　(5 分) 11：55~12：００ /こども部会副部長　田畑氏（ｅｎ和田町）

	★アンケートは、机上のＱＲコードを読み込んでご回答ください。 こども部会より令和８年 12 月に生活創造空間にしの見学会を開催予定です。内容が決まり次第、メール等でお知らせします。